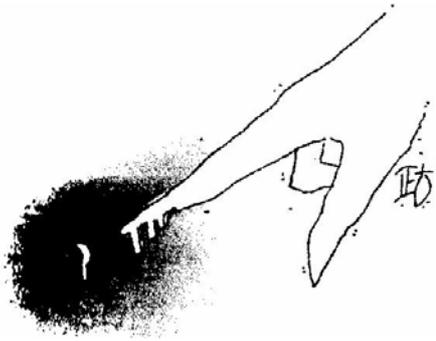


見えざる手

第1編 16章

神は創造された世界をそのみ力によって育み、見守り、摂理によってそのすべての部分を導いておられる。



私たちの理解力にはあまりにも確かに限界がある。なぜなら神の摂理に示されるその深く、高い御心をほんのわずかも知ることができないためである。そのためすべての出来事がみな神の計画に従って行われているのに、それらが起こるとき愚かな私たちはあたかもそれが偶然のように、あるいは運命的なもののように考えてしまう。

白菜一個の値段はときには50円にもなり、またときには500円になることもある。ある商売は失敗することもあり、またある事業では成功して大金を稼ぐこともある。市場の品物の価格、またそこでの勝者と敗者を決定する当事者は一体誰なのだろうか。それこそが「見えざる手」である。有名な経済学者アダム・スミスが彼の記した「国富論」で最初に使った言葉である。オーケストラに指揮者がいるように、自由経済市場にも見えざる手があるというのだ。

空を飛ぶすずめ一羽が猟師の鉄砲によって打ち落とされる。毎日変わることなく太陽は昇ってくる。突然、大雨が降って洪水が起こる。一日にたくさんのカップルが結婚をし、また少くない数のカップルが離婚する。産婦人科の病棟では赤ちゃんの泣き声が満ち、共同墓地にもまた毎日のようにすすり泣きの声が消えることがない。

この世界に毎日起こるすべてのことはどのような理由で起こるのだろうか、それぞれがばらばらに脈絡もなく起こるのだろうか。それともなんらかの力がそれを導いているのだろうか。この疑問を解く鍵が「摂理」という言葉である。アダム・スミスが「見えざる手」と感じたものがそれである。神の摂理は世界に起こるすべての事柄をあら

かじめ計画し、導かれる見えざる手と言えるのだ。

第1節 創造と摂理は切り離すことができない。

神は創造主であり、また同時に摂理の主でもあられる。神は天地を創造され、また同時にその天地を引き続き治め、導いておられる。もし、創造だけして摂理がなければ、神は創造主とはなりえない。創造主であるならば彼は摂理をしなければならない、また万物を摂理されるならば彼こそまことの創造主であると言えるのだ。神は創造された世界にある運動力を与えて、独力でそれらが運行するようにされたのではない。神はずづめ一羽に至るまで直接に、毎日、治め導かれている(マタイ 10:29、詩 33:6,13) 時に従って万物に食物を与え、殺しもし、生かしもされるのだ(詩 104:27~30; 使徒 17:28)。

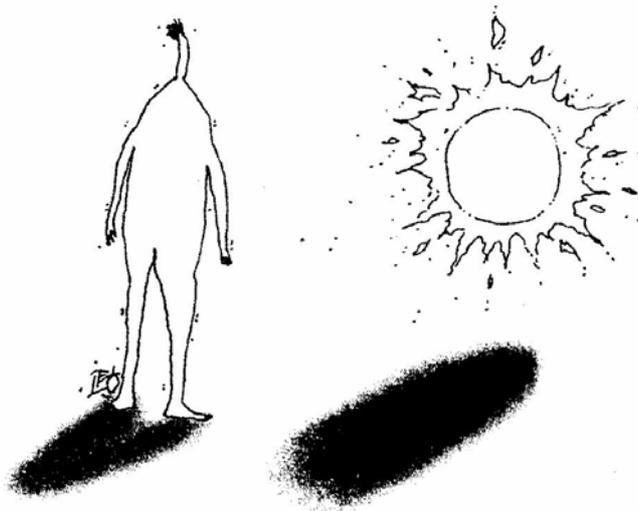
だからこそ、世の人々が信じ敬っている「偶然」ということは起こりえない。「運命」ということも同様である。人々は不幸なことが起こると運命のせいにして慰められようとする。また、その原因をよく理解することができない事柄をみな偶然のせいにして自分の無知を隠そうとするのだ。しかし、この世界には運命も偶然も存在しない。すべてのことがみな神の隠された計画と統治のもとにあるのだ。私たちの頭から髪の毛一本まで神の許しがなかったら地に落ちることはないのだ(マタイ 10:30)。

地球にあるすべての生物を育てているあの太陽も運命のような、定められた自然法則によって照り輝いているのではない。神が日ごとにそのようになるようにされているのである。だからときには止まることもあり(ヨシュア 10:13) 反対に退くこともあるのだ(列王下 20:11; イザヤ 38:8)。あなたは毎朝、必ず上ってくる太陽を見ると何を考えるだろうか。摂理の秘密を知る人は朝ごとに決められたように昇ってくる太陽を見れば、神の変わること

のない愛を賛美するようにされるのである(エペソ 3:23)。

だから当然、太陽がこの世界の万物を生存させる第一原因ではありえない。二つの意味で太陽は道具でしかないと言える。第一は太陽が造られる前にすでに光があって太陽はただその光を伝達する道具として造られたためである。

第二に前に語ったように太陽



は日ごとに神の御心と御力によって統治されている僕に過ぎないためである。それで、太陽をあたかも生命の第一原因のように崇拜し、仕える人々は愚かではないといえるのだ。ある人々はこの問題を超えてさらに巧妙に一步前に踏み出す。すなわち、万物の第一原因が神であることを受け入れるというのである。そうでありながらも彼らは神を展望台の中に閉じ込めてしまう。神は御力によって万物を創造された次にはそのすべてのものを自分で運行できるようにされ、その後、自分は遠い展望台の中に座って見物されているというのだ。このように考えればやはり人間や万物を直接に導き、治めているのが太陽や月になるからである。

このような考えから抜け出すことのできない人々は常に迷信的な恐怖から解放されることはできない。自然災害や悪い出来事に出会うとそのような被造物の顔色を伺うようになるのだ。しかし、神の子供たちは天の兆候を恐れる必要はない(エレミヤ 10:2)。世のすべての出来事はみな私たちを愛される神の隠された御心とその見えざる手の力のうちにあるためである。

第2節 神の摂理はすべてで出来事、すべての個人、すべての自然現象をみな導いている。

神は私たちの周辺で起こる大小さまざまな事柄とまた私たちにひとりひとりの上に起こるすべてのこと、そして自然のなかで示されるすべての現象をみな特別に治め、導いておられる。しかしこの点について誤って考える人々が相当に存在している。まず、エピクロス派のように神は怠惰で地上の出来事に関わりをもたないと考える人々がいる。

また、神の摂理を半分に切断してしまう人々も存在する。神は霊的世界の事柄だけを治め、その下にある自然とこの世の事柄は運命にまかせていると空想する人々である。彼らは世の出来事に関する神のこのような摂理の仕方を一般摂理と呼び、また聖書に記録された神の特別な摂理もみなそのときその特別な場合にだけ起こったことだと限定してしまうのだ。しかし、神は世のすべての出来事を直接にまた個別的に摂理されているのである(ヨハネ 5:17; 使徒 17:28; ヘブル 1:3)。

たとえば豊作や飢饉、戦争などがみな自らのある法則にしたがって起こっていると考えてみよう。それならば、私たちは世のすべての出来事を通じて働かれる神の父としての愛や、罪を罰する審判の主としての義をどこにも見出すことができなくなってしまっただろう。いったい、神はどこにおられるのだろうか。私たちは私たちの周辺で起こるすべての事柄がときには神の愛が込められたものであり、ときには神の審判が込められていることを悟らなければならない(レビ 26:3,4; 申命 11:13,14; 士師 28:2; ハバクク 2:17; 詩 147:9,113:5,6)。そのように考えるなら私たちの毎日の生活がどん

なに豊かで、また意味があることになるだろうか。

また、特別に神の摂理は人間と関係を持っている。人のすべての歩みは神が決定し、語る言葉も神によるのである（エレミヤ 10:23；箴言 20:24；16:1,9,33）。神はおひとりで人々の生死と、富むことも貧しくなることも、身分の差異をも決定される（サムエル 2:6～10；出エジ 21:13；箴言 29:13；詩編 75:6,7）。これと同じように神は自然のすべての現象も調整されている。神は荒野で風を起し、たくさんの鳥たちで自分の民の飢えを解決されたし（出エジ 16:13；民数 11:31）激しい風を送って紅海を分けられ（出エジ 14:21）嵐を起し逃亡するヨナを船から投げ出させた（ヨナ 1:4）。

第3節 すべての出来事のみことの原因は隠されている。

友人とともに旅行に出た青年がある都市で一向からはぐれて、森に入り込んで、結局、強盗に出会い殺害されてしまった。偶然であろうか。それとも彼の運命だったのだろうか。世の人々は偶然という言葉と運命という言葉をつないで愛している。その単語にあたかも神を礼拝するように仕えている。ある人たちは神がすべてのことを摂理されているということは、それはつまりストア派の宿命論ではないかと語る。

宿命論者たちは巻き起こるすべてのことを本来からそのようになるほかなかったものであると信じている。そこで自然のうちにそうなるしかほかない因果関係があると言い、世のすべての事柄はみなそのために連続して起こるようにされているのである。しかし、聖書はこのような言葉を「俗悪な無駄話」と表現している（テモテ前 6:20）。大バシレイアスも「『偶然』とか『機会』は異邦人の使う言葉であり、敬虔な人々の精神を占めることがらであってはならない」と警告している。

世の人々はよく「これは神の御心だ」と言うべきところで「これは運命のためだ」と語る悪い癖があるが、アウグスチヌスもその点を指摘したことがある。またアウグスチヌスはまたこうも語っている。世のすべての出来事はみな神の摂理に服従しているのであり、どんな偶然なことも、また人間の勝手な意志によって発生することもない。神は高い塔の上にすわって、何でもかんでも許可を与えようとされる方ではなく、直接すべてのことがらに介入される方であると言う。しかし、彼はすぐに次のようにも主張している。私たちは神があることをなぜそのように計画され、行われるかをすべて知ることができないのであると。

アウグスチヌスのこの最後の主張は非常に知恵深い発言である。なぜだろうか。私たちの理解力にはあまりにもはっきりとした限界があって、神が摂理されるその深く、高い御心をほんの少しも知ることができないためである。だからすべての出来事がみな神の計画によって、行われるとするのだが、それが発生するときには愚かな私たちの目にはちょうど偶然のごとく、運命的な出来事のように見るのである。このよ

うな意味での「運命」という言葉がコヘレトの手紙にたびたび登場する（コヘレト 2:14,15, ; 3:19,9:2,3,11）。

あまりにも制限されている人の目にはある事件が偶然ともなり、運命ともなるのである。今、前に例にあげた青年の死をもう一度考えてみよう。偶然だろうか。運命だろうか。そうではない。神は彼の死をあらかじめ知っておられたし、また、そうなるように計画されたのである（ヨブ 14:5）。神の摂理が運命を決め、計画された目的に向かって導くのである。私たちには神の深い御心をみな知ることができないだけである。聖書にはそのような例が満ちている。そしてすべての場合、幸いにも神の意図するところが明らかに実現しているのである（例、ヨハネ 19:33,36）。

結論

世に起こるすべての事柄が私たちの目には偶然や運命のように見えるが、そのすべての事柄の背後には神の見えざる手が働いている。だから万物を通してみな神の隠された御心になるのである。人間の頭では神のその深く、高い御心をみな知ることができない。すべてのことに隠された神の御心をみな知ろうとすることはたいへんに愚かなこととなるのだ。「隠れた事はわれわれの神、主に属するものである。しかし表わされたことは長くわれわれとわれわれの子孫に属し、われわれにこの律法のすべての言葉を行わせるのである」（申命 29:29）。